

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	JMLA活動報告 分科会B「電子ブック」参加報告
別タイトル	JMLA Reports : Sectional Meeting B
作成者(著者)	村上, 千晶
公開者	日本医学図書館協会
発行日	2018.09.01
ISSN	04452429
掲載情報	医学図書館. 65(3). p.183 185.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	JMLA活動報告
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD21441140

分科会B「電子ブック」参加報告

村上 千晶*

東邦大学医学メディアセンター

I. はじめに

2018年5月29日(火)、東京都千代田区の日本教育会館にて第89回日本医学図書館協会(以下、JMLA)総会の分科会が開催され、139名(参加者名簿による)が参加した。本稿では、分科会B「電子ブック」について報告する。

座長は中西秀彦氏(中西印刷株式会社代表取締役社長)、話題提供者は、植村八潮氏(専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科教授)、田口宣行氏(埼玉医科大学附属図書館係長)、城山泰彦氏(順天堂大学学術メディアセンター司書)の3名、コーディネーターは諏訪部直子氏(杏林大学医学図書館)であった。

まず、話題提供者の3人の方々から発表があり、次に参加者を含めたディスカッションが実施された。

II. 話題提供

1. 「日本における電子ブックを取り巻く状況」

植村氏は日本における電子ブック研究の第一人者である。本発表では、日本の電子書籍市場、公共図書館や大学図書館におけるサービス等、電子ブックに関する現状について幅広く解説がなされた。

日本の電子書籍市場は、2013年度から2016年度の4年間で約2倍以上に成長し、その中心となるコンテンツはコミックスである。2017年には、電子コミックスの販売額が紙のコミックス販売額を上回っている。

現在、電子書籍として流通しているものの多くは、紙で出版された書籍や雑誌を電子化し、流通させている「電子書籍1.0」である。一方で、小説投稿サイトや印刷版のない電子雑誌等、ポーンデジタルコンテンツである「電子書籍2.0」の普及も進みつつある。例えば2016年の本屋大賞第2位を受賞し、映画化もされた住野よる著

『君の膵臓をたべたい』も、最初は小説投稿サイト「小説家になろう」に投稿され、後に書籍化されたポーンデジタルの作品である。

植村氏は2013年から毎年「図書館における電子図書館・電子書籍貸出サービス等のアンケート調査」を実施している。これによると、公共図書館における電子図書館サービスの導入率は、未だ全国の公共図書館(中央館)の4.7%にすぎない。「2017年電流協電子図書館調査」¹⁾では、電子書籍貸出サービスのコンテンツに対する懸念事項として、59.9%の館が「提供されているコンテンツが少ない」と回答しており、コンテンツ以外の懸念事項としては、76.9%の館が、「予算の確保」を挙げた。これについて植村氏は、「『予算の確保』が本当の導入障壁ではないか」と指摘した。

一方で、大学図書館における電子資料の導入は本格化している。植村氏が2017年に同調査の一環として実施した関東地区に所在する国公立大学の図書館へのアンケートでは、「電子ジャーナル」「データベース」の導入率は9割を超え、理工系ではほぼ100%となっていた。また、「電子書籍貸出サービス」導入率は全体の61%であった。「電子書籍貸出サービス」導入率を大学の分野別に見ると、総合大学は87%、医学系では31%となっており、医学系大学では比較的普及率が低い。

しかし、国内医学系の主要出版社が共同で運営している「医書.jp」のサービスが始まったこともあり、植村氏は、今後は医書における電子書籍の利用も増えていくのではないかと予想した。

2. 「電子ブックとコンソーシアム」

田口氏は、JMLA学術情報コンソーシアム委員会委員長を務めており、電子ブックに関するコンソーシアム提案とその契約の現状について解説した。

JMLAでは、2000年より電子ジャーナルのコンソーシアム事業を開始しており、2002年からは、日本薬学図書館協議会と共同で事業を行っている。しかし、

*Chiaki MURAKAMI : 〒143-8540 東京都大田区大森西5-21-16.
(2018年7月18日 受理)

2018年度の電子ブックのコンソーシアム提案数は、全提案数の2割程度、また、電子ブックの契約成立数の割合は、全契約成立数の7.1%であった。このことから、電子ブック導入に対するコンソーシアムの貢献度は低いといえる。

例として、癌・腫瘍学の基本図書である『Cancer』第10版を挙げた。この図書は、2016年～2017年に買い切りで電子ブックのコンソーシアム提案があった。冊子で所蔵しているJMLA加盟大学図書館は30館あるが、電子ブックのコンソーシアムが成立したのは6件のみであった。

電子ブックの普及が進まない理由としては「冊子より高額」「導入されても利用されない」「必要なタイトルがない」「新刊が少ない」等を挙げた。

発表の最後に田口氏は、「医書.jp」の2019年向けコンソーシアム提案交渉は見送りになりそうだが、今後の電子ブックの機関向けサービスに期待したい、と述べた。

3. 「日本の医学図書館の傾向と、本学の導入事例」

城山氏は、自らが勤務する順天堂大学学術メディアセンターにおける事例を紹介した。

順天堂大学学術メディアセンターでは、2010年に電子ブックの整備を開始した。当初は経常補助金を使い、シラバス掲載図書や推薦図書といった必要なタイトルを買い切りで個別購入していた。学術情報の電子化を積極的に進める理由を城山氏は3つ挙げた。第1は利便性である。電子資料は学外からアクセス可能なものに関しては場所を選ばず利用ができ、開館していない時間も利用可能である。

第2は、書架スペースの節減である。本郷・お茶の水学術メディアセンターは2015年8月に高層ビル内に移転して書架が減ったが、電子ブックであればスペースをとらずに同じコンテンツを提供可能である。

第3は、立地や建物による制約である。順天堂大学には、4つのキャンパス、6つの附属病院があり、それぞれの距離は離れている。また同じキャンパス内でも、学術センターへのアクセスが不便な建物もある。その問題を解消するため資料の電子化を進めた。医学系欧文ジャーナルとデータベースは2017年に全て電子版のみの契約とし、和文ジャーナルについても契約可能なタイトルはすべて電子版を契約している。図書は残されたターゲットであった。

城山氏は電子ブック提供における課題として、「可視化」を挙げた。電子ブックは「カタチ」がなく、電子

ジャーナルとは違い文献データベース等からのリンクが少ないため、ウェブサイトで探し出してもらう必要がある。順天堂大学ではこの課題を解決するため、現在、OPACへの搭載や、学生向けの電子シラバスへのリンク実現を検討している。そのほか、コンテンツの充実やプラットフォームの共通化、買いやすさも「電子ブック」利用促進の鍵と挙げた。

4. 「ディスカッション」

Q1. 電子ブックの学生の閲覧数について教えて欲しい。

A1. 城山氏：電子ブックはシラバスを中心に購入しているので、学生の閲覧数が多いのではないかと。しかし、アクセス数しか統計では出せないで、身分別の閲覧数はわからない。

植村氏：アメリカでは、学生にused bookが人気である。学生は、先輩が図書に引いたマーカーを欲しがる。

城山氏：本来であれば閲覧数が増えたと多くなりそうなタイトルも購入しているのだが、閲覧数が少ない。

植村氏：紙向けに作られたものは紙で読みたいものである。デジタル向けに作られたコンテンツが増えていかないと、デジタルの時代は来ない。紙とデジタルはコンテンツの作りが違う。「構造がある学び」には、紙の方が向いている。

中西氏：シークエンスデータは紙、ランダムデータは電子の方が扱いやすい。やはり紙の上で作られたものは紙の方が良い。

Q2. 自分の所属する図書館の例として、複数の教科書を推薦されると、学生は図書を買わなくなる。図書館で借りるようになっている。

A2. 植村氏：アメリカではコースパック（教員の自作編集教材）が当たり前である。海外で学んだ人が、その制度をどんどん持ち込んでいる。

Q3. こちらから図書の電子化は提案できるか。

A3. 松田氏（特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会）：医書.jpに言うと電子化を進めてもらえる。

Q4. 出版社との交渉の仕方が難しい。お互いの利益の問題がある。

A4. 植村氏：電子ブックは、おいしいところをプラットフォームが持っていく傾向にある。Amazonでは、プラットフォームが利益の7割を取っていく電子ブックもある。そこが不安である。

Ⅲ. おわりに

「電子ブック元年」と言われる2010年から8年が経過した。電子ブックは徐々に身近な存在になりつつあるが、依然として課題は多く、「今後に期待」されている存在であるのだと、当分科会を通じ改めて実感した。

私が所属する東邦大学医学メディアセンターでも電子ブックは購読しているが、正直、利用者にとってあまり馴染み深い存在ではないという実感がある。実際に、レファレンス対応で学生に電子ブックを勧めたところ「よくわからないので、紙の本が良い」と言われてしまったこともあった。植村氏の話の中で「電子書籍市場の8割は電子コミック」だと紹介されていたが、利用者にとっては電子ブックといえばコミックという認識が強く、医学書の電子ブックに対して抵抗があるのではないかと

思った。

しかし、多くのキャンパスがある大学で他キャンパスから取り寄せの手間なくすぐに図書を利用できる、リモートアクセス環境の整備により学外からでも図書の利用ができる等、電子ブックのメリットは大きい。電子ブックが図書館にとってより契約・提供がしやすくなるよう期待するとともに、利用者に気軽に電子ブックを利用してもらえるよう、利用者へのアプローチを工夫してみたい。

参考文献

- 1) 植村八潮, 野口武悟, 電子出版制作流通協議会. 電子図書館・電子書籍貸出サービス調査報告2017. 東京:電子出版制作流通協議会;2017.